

仏教からみたヒト受精胚の取り扱いの在り方

中野東禅

I、 仏教から見た生の始まり（誕生）に関する考え方

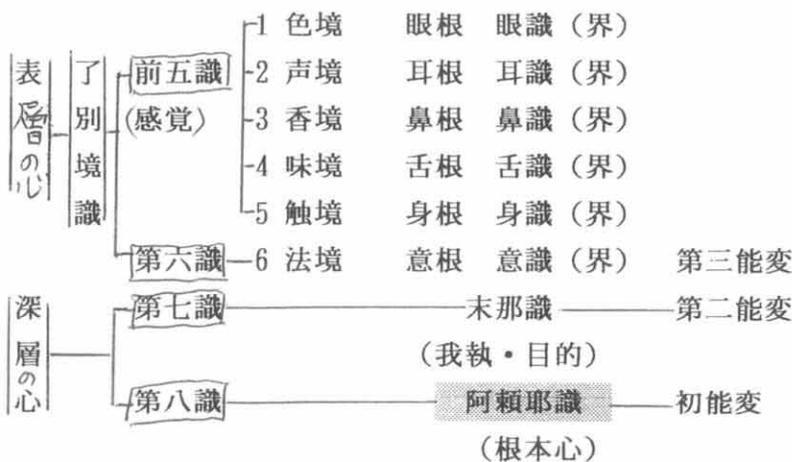
…阿頼耶識説による考察…

結論 1) 仏教の生命観は、関係性（縁起）に支えられて自立（根）する能力とする。
 2) 生命とは「自己意識」である。（他者との関係性）
 3) ①精子・卵子、②胚、③着床、④心臓と脳の成立、⑤母体と分離して自立。
 の内、①はヒトになるものゆえに尊厳がある、③で自立の始まりといえよう。
 4) 生命は個体としてのまとまり…分散しつつあるものは個体ではない。
 5) 生命は絶対とはいえ、自己からみたら余分は捨てられる。

A、 仏教の存在論

- 1、縁起・仮和合（多くの条件の習合による仮の和合で、変化と無固定で現象重視）
- 2、真理としてのいのち（仏の命を生きている・より良く生きる責任主体の存在）

B、 仏教の宇宙観・存在論・生命観の総合としての唯識学



C、 阿頼耶識とは命とこころの不分離状態

「生命・自己意識」としての「阿頼耶識」の特性

- 1、個体発生以前に先験的能力を記憶している。（生命にも、そこから働く意識にも）
- 2、外界を自分の中に収める力（諸法を攝蔵する）能力をもっている。
- 3、善にも悪にも瞬時に変化する（暴流のごとき）能力を持つ。
- ④、自己執着（自己愛。自己維持）能力を持つ。
- ⑤、生命を持続する（寿煖識）能力を持つ。（刹那消滅で変化しつつ固定的でないが）